

清末小説から 94

2009.7.1

「老残遊記」執筆経過の謎 2 完.....樽本照雄 1

《蔓陀羅克》の原作.....渡辺浩司12

从 MS.FOUND IN A BOTTLE 到《冰洋双鲤》.....呉 燕19

晩清小説作者掃描(拾玖).....武 禧24

清末小説から23、26

劉永文編『晩清小説目録』(上海古籍出版社2008)が刊行されました。阿英の晩清小説目から約50年目、中国人研究者の手になる本格的目録です。新聞小説を多く採録しているところが特徴だといえます。書評を書きました。歎息するのは、清末翻訳小説が、やはり空白になって閉

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

「老残遊記」執筆経過の謎 2 完
書簡集『滄榕書札』に見る

樽本照雄

4. 劉鉄雲「乙巳日記(1905)」の「老残遊記」執筆は不可解という(【033-60-15】)

以上に見る「老残遊記」執筆経過は、劉厚沢の頭の中でほとんど確定してしまう。それにもとづいて資料を見ると、どうなるか。

原稿(注:劉蕙孫「年譜長編」)の誤った箇所、つまり別紙に書きたいくつかのほかで比較的大きな誤りは、おそらく「遊記」の著作時間でしょう(前の手紙でお伝えしましたように、私の原稿で頭を悩ませている点ですが、今はすでに判明しています。私の推定は完全に正しいのです)。あなたの原稿の1904年に「「老残遊記」小説を書く」と書いてあります。私は、二集[続篇]は1905年以前に、初集[正篇]は遅くとも1903年前後に書かれたと推測します。昨日、作協へ行って最初の(掲載誌である)『繡像小説』雑誌を探して調査しましたが、第1回は癸卯年八月の第9期に掲載されています。まさに1903年で、全部で10期に掲載され第18期以後にはありません。これにより、1903年に

はすでに刊行されていて、1904年に書くということはありません。あなたが書き写してきた「乙巳日記」は1905年で、当然ながら正しくありません。しかし、祖父が書き誤るということはありませんから、表紙をつけ間違えたのではありませんか？道理からいえば、その時期は連続していましたから、書き直す可能性もありません。もしも『天津日日新聞』のために書き直したのであれば、1字も違わないということは断じてないのです。しかも、商務印書館本がすでに重ねて発表されていますから、書き直す必要はありません。まことに不可解です。あるいは、私が前の手紙で言ったように、「二集[続集]」は本当は9回では終わっておらず、14回でもまだ終らなかったということでしょうか。この点(執筆時期)については、1903年のあとに(原稿を)切り張りするのがよろしいかと考えます。いかがでしょう。73-74頁

身内どうしの手紙だから当事者ふたりは、十分に理解しているのだろう。だが、私にはわかりにくい箇所がある。

たとえば、「老残遊記」初集についてだ。初集は1903年の『繡像小説』に連載された。それは、いい。ただし、この初集は『繡像小説』编者による原稿の没書事件が発生している。劉厚沢らは、父劉大紳の文章を読んでいるから、それを知らないはずはない。知ったうえで、お

よその執筆経過を推測していると思われる。この段階では、そうだ。

その上、『繡像小説』は半月刊が守られて刊行されたという定説にも従っている。だから、該誌第18期は1903年旧暦十二月に刊行されたと考えている。実物には刊行年月が記載されていないにもかかわらずだ。そこから、初集は「1903年にはすでに刊行されていて、1904年に書くということはありません」ことになる。

劉厚沢は、自分の推測が正しいと自信をもった。そのため、劉鉄雲「乙巳日記」の1905年に原稿を執筆したのは正しくないと述べるにいたる。奇妙である。自分の推測を事実優先に優先させるという誤りを犯した。また、劉鉄雲の生前には刊行されたことのない商務印書館版『老残遊記』を持ち出すのもおかしなことだ。

結局のところ、「老残遊記」執筆経過を考えるばあい、没書事件を考慮にいれ、劉鉄雲日記の記述とつきあわせなければならなくなる。その時、説明することのできない事態に直面するのは必然なのだ。それが判明するには、もうすこし時間がかかる。

5. 劉鉄雲「乙巳日記」を重ねて否定し、『天津日日新聞』を探索する(【034-60-16】) 自分の推論は正しい、と劉厚沢の持論に対する自信は継続する。

(乙巳)日記に見える執筆年代は、『繡像小説』をすでに調査して、それが確かに間違いであることが証明されました。そうであるならば、私

たちの推定は、新しい発見である可能性がとても大きいのです。このことについて、あなたの「年譜」ではすでに提起しています。魏紹昌君も意気込んで、1万号の『天津日日新聞』があることを知って、彼はすでに作協から天津に連絡してなんとかさがそうとしています。私の考えでは、双方が並行して進めるのがよく、誰が先に到達してもいいのです。76頁

初集執筆は1903年、二集執筆は1904年だと劉厚沢は考えている。だから、1905年「乙巳日記」の記述が正しくない、とかさねて述べる。自説によほど自信があるのだ。ここまで思いこむと自分から訂正するのはむづかしい。考え直すにしても、新しい資料はないのだからなおさらだ。

劉厚沢の推測が正しいかどうかは、『天津日日新聞』の連載を見ればすぐに判明するだろう。該紙上には、「老残遊記」初集と二集が連載されている。だが、新聞の探索はすぐに実現しそうにみえて、結局は失敗した。

約半月後の手紙には、つぎのようにある。

『天津日日新聞』の古新聞について、作協ではすでに各地に手紙を送ってさがしています。現在返答を得ているのは、国立北京図書館から『京津日日新聞』があるだけで『天津日日新聞』は収蔵したことがないということ。天津人民図書館からも

返事がきており、収蔵したことはないといいています。ゆえに希望は極めてとぼしいです。【035-60-17】81頁

2008年現在も『天津日日新聞』がどこかに所蔵されているという情報は、ない。資料的な裏付けがなく少しの手がかりを見つめて新たな推測が生まれた。

6. 二集が30回前後あると推測する(【037-60-19】87頁)

劉蕙孫からの提案で『天津日日新聞』の探索先を『大公報』資料室にまでひろげた。その一方で、劉厚沢は、考えをもう一步すすめている。すなわち、「老残遊記」二集は30回前後あるのではないが。劉厚沢があげる主な理由は、「乙巳日記」に二集が16回あると証明されている、ということ。もうひとつは、外編の冒頭に、60回を書いたが後ろの40回は薬を包んで数回がなくなった、と説明していることだ。

「乙巳日記」に見える執筆の年月は間違っている。これが劉厚沢の到達した考えである。しかし、日記に二集16回を書いたとあるのだからその箇所は信じるに足る、ということになる。推測の域をでない、と私は思う。

劉厚沢らが資料編集の作業を続けていた時、『文匯報』から「老残遊記」二集3回分を先に新聞に公表するように要求があった。劉厚沢にしてみれば予想もしなかった突然の申し入れだ。

劉厚沢の書簡では、つぎのように書いてある。

「『文匯報』がどこから情報を得たのかわかりませんが、作協をさがして(二版編集員の徐開壘同志です)後ろの3回を彼らにまず渡し新聞紙上で発表したあと単行本にするよう要求しています」(【040-61-01】95頁)

情報源は、ほかならぬ魏紹昌だった。彼は、自分の書いた文章が『文匯報』に掲載されることを劉厚沢らへ前もって知らせてはいない*9。

魏紹昌「《老残遊記》残稿」(『文匯報』1961.1.29初出未見 / 『中国近代文学論文集』(1949-1979)小説巻 中国社会科学出版社1983.4。444頁)である。「最近、作者(劉鉄雲)の孫劉厚滋、劉厚沢のところで、当時の二集切り抜き本の写本、および未発表の老残遊記外編残稿が発見された。これにより、二集9回本の未発表分3回ばかりでなく、劉鶚の外編残稿を同時に読めるのである」。彼は、『資料』の大きな柱となる二集3回と外編の存在を『文匯報』に公表した。

当時は「老残遊記」批判が継続されていた。「この原稿の発見は、われわれが今老残遊記およびその作者をいっそう深く研究し批判するための助けになる」と書くのは、そうする必要があったからだ。

7. 「老残遊記」執筆経過の謎(【053-61-14】151-152頁)

劉厚沢があればほど自信を持っていた「老残遊記」の執筆経過であった。ところが、大きな謎があると「彼ら」から問題提起がなされる。「彼ら」というのは魏紹昌を含んだ作協の人々だろう。疑問

点が箇条書きにしてある。本稿に係する箇所のみを引用したい。文末に記号「」をつけたのが、彼らからの指摘を示す。

十月の日記で初三に遊記11回を書き、つづく初四に15回を書いているのは不可解だ。誤記か、あるいは省略したのか。原物で示すために「乙巳日記」を書留で私のところに送るよう要求する。

実をいうと、「老残遊記」執筆経過の謎に気づいて文章を先に発表した人物がいる。これも魏紹昌だった。「《老残遊記》続集的一段内幕」(『羊城晚報』1961.4.17-18初出未見 / 『中国近代文学論文集』(1949-1979)小説巻 中国社会科学出版社1983.4)という。

部分的に紹介する。

二集は14回までを掲載して止まった。ただし、劉鶚の「乙巳日記」を調べると、彼はその年(1905)の十月初五日に二集の第16回をまだ書いている。ゆえに「老残遊記」二集は少なくとも16回はなくてはならない。残念ながら当時の『天津日日新聞』は探し当てることができず、そのため二集は結局のところ何回掲載されたのか、完全には確定できなくなっているのだ。446頁

魏紹昌は、「劉鶚の「乙巳日記」を調べると」とたしかに書いている。だが、

彼は「乙巳日記」を見ているわけではない。未発表である劉厚沢の注釈を読んで、そう述べているだけにすぎない。しかし、内部事情を知らない人がこれを見れば、魏紹昌が「老残遊記」の執筆経過について詳細を知っていると思うだろう。

魏紹昌が「巧み」なのは、「乙巳日記」に記述された「老残遊記」執筆に謎があることを一般には説明しなかった点だ。第16回をまだ書いている、と指摘したのみ。劉厚沢が兄あての手紙で自説を説明した箇所を見てほしい。「二集は15回以上が書かれてはいたが、新聞に掲載されたのは第14回までだった。そのうちの9回分が現存している」。この考えを魏紹昌にも告げただろう。それを、魏はこれまた劉厚沢には無断で文章にして公表した。2度あることは3度あるだろう。

魏紹昌は、劉厚沢の書いていた注釈を検討している。その過程で謎があることを見つけた。それが上の手紙の疑問と指摘になる。「乙巳日記」の実物で確認したかったらしい。

問題の1905年「乙巳日記」から該当部分を示す。

十月初三日，歸寓撰《老残遊記》卷十一告成。

十月初四日，晴，撰《老残遊記》卷十五。

十月初五日，晴，決計回京……撰《老残遊記》卷十六。

(『資料』94頁)

劉厚沢は、二集の執筆は1905年以前、

日記に16回があるから30回前後は書いていた、という予測を立てていた。だから、1905年に二集原稿を執筆しているのは誤記ではないかと疑った。ところが、「彼ら」は「乙巳日記」に矛盾があることを指摘したのである。劉厚沢は、この日記の記述に不審な箇所があることに以前は気づかなかった。

十月初三日に二集第11回を書き終っている。翌日には第15回を書く。第12-14回はいつ書いたのか。この疑問がだされた。劉蕙孫も説明していない。劉厚沢も考えたことはなかった。

他人(魏紹昌だろう)から質問された劉厚沢は答えることができない。「乙巳日記」を送るよう要望した理由である。

初集の執筆時期についてもいわれた。

……たとえば、あなたはこのたび「老残遊記」執筆時期を1904年の第3項目に配置しています。私は魏紹昌と研究しましたが、疑いなく間違っていますから、1903年の第2項目に移動させなければなりません(もとの第3項目は九月のことで、私たちは沈蕙が死亡したのは閏五月であるとすでに調査しています。『繡像小説』の発表は八月ですから、執筆開始は閏五月から八月の間でなくてはなりません)。…… 151-152頁

文末の は、劉厚沢を含めた複数の意見であることを表わす。

劉蕙孫は、劉厚沢らの意見を受けいれた。のちの『鉄雲先生年譜長編』(済南・

齊魯書社1982.8. 107頁)を見れば1903年第2項目に配置して説明している。

さらに、もうひとつ大きな謎が提出される。

「二集[続集]」は乙巳年に書いていますから1905年というのは確かです。しかし、父親の文章には光緒三十三年六月に亡父(劉鉄雲)が漢口におもむき、毎日1節を切り抜くとあります。両者は符合しません。なぜなら三十三年は1907年ですから、1905年に書いて『天津日日新聞』に連日掲載するのが二年後で、それを毎日切り抜いて保存するようにつけるということはありえません。まして、当時一世を風靡した小説が、二年も放置されたあとでようやく掲載されるという可能性もありません。筋が通らないと彼らは考えていますし、私も解釈のしようがないと考えます。現在、二集[二編]の執筆時間は多くの角度からみて1905年であるのは確かですから、私は父のいう三十三年六月に漢口におもむいた時間は誤記したものではないかと疑っています。残念なことに、その年の日記はありませんから、あなたがなんとか探し出すか、あるいはその正誤を確定できないものでしょうか？

152頁

「老残遊記」執筆経過の謎は、二集について大きくふたつある。両者ともに「乙巳日記」の記述に係る。

二集第11回を書いた翌日に第15回を執筆したのはなぜか。第12-14回はいつ書いたのか説明ができない。これがひとつ。もうひとつは、1905年に原稿を書いて『天津日日新聞』掲載が二年後というのは筋が通らない。

結局のところ、劉厚沢、劉蕙孫、また魏紹昌らは、問題を解決することができなかった。劉厚沢は、『資料』94頁の注9において、日記の記述をかかけてふたつの謎が存在することをそのまま正直に説明した。

ふたつの謎を解決できなかった理由はなにか。私は、彼らがある「思い込み」に束縛されていたからだと考える。「老残遊記」二集の原稿執筆は1905年である、という思い込みにほかならない。

すぐ上の引用を見てほしい。劉厚沢は、「現在、二集[二編]の執筆時間は多くの角度からみて1905年であるのは確かですから」と説明している。この考えは、どこからきたのか。

二集執筆1905年説の根拠

劉厚沢は初期の段階(前出番号4)で、「二集[続篇]は1905年以前に、初集[正篇]は遅くとも1903年前後に書かれたと推測します」と書いている。ゆえに、1905年「乙巳日記」の二集原稿執筆はそれと符合しない、と疑問を提出していた。彼はのちに考え直し、二集執筆は1905年が確かだとする。劉厚沢がそう確信するにいたったひとつの要因は、阿英の論文を読んだからだ。

阿英「關於老残遊記二題」(『宇宙風乙

刊』第31期1940.10.16初出未見 / 『小説二談』上海・古典文学出版社1958.5)である。

阿英は、該文の「老残遊記版本考」において「劉大紳「老残遊記について」によれば」と書きはじめる。それを収録した『小説二談』は、1958年に出版されている。劉厚沢が論文執筆を準備していた頃とほぼ同時期だ。劉厚沢は、たしかに阿英の文章を読んでいた*10。手紙のなかではいちいち「阿英によれば」と説明しないだけのこと。

阿英は、「老残遊記」が『繡像小説』に掲載された期数などについて詳細に解説する。雑誌の実物にもとづいているから正確である。

たとえば、『天津日日新聞』が掲載した「老残遊記」は削除された部分からである、という劉大紳の説明を阿英は訂正する。阿英が所蔵する『天津日日新聞』本には第1回からある。劉大紳のこのような途中からの新聞掲載ではないことは明らかだ。

しかも、阿英が彼の手元においている『天津日日新聞』本の裏は全面に広告を掲載しているという。つまり、新聞から直接切り抜いたものに違いない。きわめて珍しい部類に属する。

阿英は、その刊行年についてつぎのように書く。

その掲載時期は、商務(印書館)が掲載を中断した翌年、すなわち甲辰(一九〇四年)である。61頁

これを普通に読めば、「老残遊記」初

集20回は「1904年」に新聞連載された、ということが明らかだ。わざわざくりかえすまでもない、と思われるだろう。1904年だと阿英は断言している。阿英が所蔵するのは、ほかでもない『天津日日新聞』切り抜き本である。いくら強調してもよい。新聞の実物にもとづいているから疑いようがない。誰もがそう考える。1904年に初集20回は新聞紙上での連載を完結したから、翌1905年「乙巳日記」にでてくる「老残遊記」は二集だ。当然、そうなる。

1903年、『繡像小説』で連載を開始し、没書事件で中断した。1904年、『天津日日新聞』にあらためて第1回から掲載しはじめ20回で初集が完成する。ひきつづき1905年に二集の原稿を書く。

「老残遊記」執筆の経過としては、以上の順序で矛盾するところは、一見してなにもない。だからこそ、劉厚沢と劉蕙孫兄弟、また魏紹昌も「老残遊記」二集執筆1905年説を信じた*11。

劉厚沢は、「老残遊記」の『天津日日新聞』掲載は1904年だという阿英の説明を支持し、それをわざわざくりかえしている。

(5)『繡像小説』半月刊の第9期から18期までは、「老残遊記」第1回から13回までを掲載し、毎回挿絵が2枚あり、その時間は光緒二十九年癸卯八月初一から十二月十五まで、西暦では1903年9月から1904年1月である。『繡像小説』は原稿第11回の全文を削除し、各回を前に移動し

たから中止した第13回は、実は原稿の第14回である。翌年、光緒三十年甲辰(1904)に『天津日日新聞』が「老残遊記」を転載したが、おそらく「後半」だけではなかった。阿英同志の考証によると、新しく第1回から掲載をはじめたというが、私もその考えに賛成する。(『資料』93頁)

ところが、劉鉄雲「乙巳日記」の「老残遊記」二集執筆経過に謎が生じた。第11回を書いた翌日に第15回を書いたのはなぜか。1905年に原稿を書いて、新聞連載が2年後であるのはなぜか。二集執筆1905年説が正しいと考えるかぎり、この謎を解明することは不可能である。事実、解明不能だと注釈9に書いていることは述べた。

謎の解明 「乙巳日記」の第11回は初集「乙巳日記」に見える執筆の謎を解く鍵は、原稿第11回である。「二集」の第11回だと考えるから理解不能になる。実は、「初集」の第11回原稿だ。劉鉄雲の日記をよく見てほしい。「老残遊記」と書いてはある。しかし、「二集」だとはどこにも明記されていない。この事実には私は気づいた。

没書事件があったことと関連する。

『繡像小説』の編集者によって没書にされたのが初集原稿第11回だった。『天津日日新聞』に第1回からあらためて連載するにしても、ボツになった第11回を復元しなければならない。手元に置いていた下書き手稿をもとにして書き直した。

これが「乙巳日記」に見える第11回だ。

日記の第11回は二集ではなく初集だ、と私は理解した。その瞬間に謎はとける。わかってしまえば、どうということもない。

「乙巳日記」は、初集第11回のボツ原稿を復元した事実を記録している。第12-14回は『繡像小説』に掲載されたから書く必要はない。そのまま新聞社に渡せばよい。翌日に執筆している第15回以降は、新しい構想にもとづく初集の原稿である*12。

謎の解明に挑んだ人々

劉鉄雲「老残遊記」の執筆過程について謎がある。その謎の存在に気づいた複数の研究者がいた。振り返れば、それが表面にあらわれてくるのは、30年代からだった。

時間の順序にしたがえば、謎がでてくる間接的なきっかけは『老残遊記二集』6回(上海・良友図書印刷公司1935.3.1)の刊行である。

二集の再公開は、大きな反響をよんだ。

二集を刊行した良友図書会社が刊行している雑誌が『新小説』だ(梁啓超の『新小説』と同名だが、なんの関係もない。良友は『人間世』も刊行していた)。主編が鄭君平で、その知り合いのひとりに趙景深がいた。「老残遊記」についての文章を書くように求められた趙景深が発表したのが、「老残遊記及其二集」(『新小説』第2巻第1期通号第6期1935.7.15 / 『小説閑話』上海・北新書局1937.1)となる。

趙景深によって提出された問題は、本文の異同についてだった。

趙景深は、彼の父親が持ち出した疑問を示す。すなわち、『繡像小説』に掲載された「老残遊記」は、単行本の第9回から第11回まで、本文が異なっている。北の義和団運動と南の革命運動を批判する「北拳南革」関連部分が、『繡像小説』には掲載されていないことに注目した。もうひとつの疑問はこうだ。「跋」を書いている劉鉄孫によれば、初集20回と二集6回は『天津日日新聞』紙上に発表されたというが、それでは初集も同時に『繡像小説』に発表されたのだろうか。阿英氏は『繡像小説』を所蔵していると聞くから、彼に答えてもらいたい、うんぬん。

30年代において、『繡像小説』72期の全揃いを所蔵する人は多くなかったことがわかる。趙景深自身の手元にもない。当時から清末小説資料の収集家としても阿英は有名だったらしい。わざわざ阿英を指名した理由だろう。この段階で判明しているのは、本文について雑誌初出とのちの単行本に違いがあるというだけだ。発表の時間がどうなっているかまでは、考慮されてはいない。

初集原稿の第11回が没書になった事実を公表したのは、前述の劉大紳「關於老残遊記」(『文苑』第1輯1939)だ。趙景深の文章は、それ以前に書かれた。彼が没書事件を知らないのも当然だろう。

阿英は、趙景深の問いに答えた。筆名の魏如晦を使用する「老残遊記校勘記」(『文林月刊』第6期1941.11 / 『小説四談』

上海古籍出版社1981.12)である。阿英は、『繡像小説』と亜東図書館本を比較対照し、第11回が原本(『繡像小説』)にないこと、これはのちに加筆したものに違いない、と説明した。加筆ではなく没書を復元したのが事実だ。しかし、阿英は知らなかった。彼が本文を校勘した時、劉大紳の文章は読んでいなかったらしい。

公表の時間は前後するが、阿英は「老残遊記」関係の論文をもうひとつ発表する。前出の魏如晦(阿英)「關於老残遊記二題」(『宇宙風乙刊』第31期1940.10.16初出未見)である。こちらの阿英は、劉大紳の文章をすでに読んでいる。だから、没書事件があったことを知って、そう解説する。しかも、『天津日日新聞』の初集について「その掲載時期は、商務(印書館)が掲載を中断した翌年、すなわち甲辰(一九〇四年)である」と根拠もなく断定したのである。「老残遊記」執筆経過についての誤解は、阿英のこの断言によって発生したことはすでに述べた。

以上は、「老残遊記」の原稿執筆過程と没書事件がおもな論点だった。問題は、それだけではない。

李伯元「文明小史」が、劉鉄雲「老残遊記」から文章を無断引用した。盗用問題が出現する。その事実があることに気づいた最初の人物は、これも阿英だ。彼の書いた「(文明小史)叙引」(北京・通俗文藝出版社『文明小史』1955.7)が証拠である。ただし、盗用というあからさまなことばは使用していない*13。阿英は、どう説明したか。李伯元は劉鉄雲と同じく「北拳南革」に反対し、「文明小史」

第59回では1,500字を用いて革命党、義和団を罵った、と書く。この解説を見ただけでは、盗用の事実は浮かんでこない。ふたりの考え方が一致していたというだけ。

だが、阿英は「文明小史」の本文に対してある奇妙な処理をほどこした。「老残遊記」と同内容だという1,500字を「文明小史」から削除したのである。「叙引」にもわざわざ注をつけて「この1,500字は、本書ではすでに削除した」と書く(4頁)。李伯元と劉鉄雲がたんに同じ見解に立っていた、というだけならばその共通する部分を削除する必要はない。それどころか、両者を比較検討するためには該当箇所を削除してはならないのだ。阿英は、盗用を知りながら明言はせず、ほのめかした、と私は理解する。

阿英の示唆を敏感に察知していた人がいた。魏紹昌である。彼は、みたび劉厚沢らには知らせることなく文章を公表した。「李伯元与劉鉄雲的一段文字案」(『光明日報』1961.3.25 / 魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12)である^{*14}。

魏紹昌は、劉厚沢らに自分が論文を書いたことを知らせていない。『滬榕書札』には魏紹昌の該論文に関する言及はないのだ。その根拠としていいだろう。当然ながら、『資料』にも盗用事件についての指摘、あるいは注釈も存在しない。当時、劉厚沢が力を入れて継続していたのは、劉大紳論文について注釈をつける作業だった。もし、魏紹昌から盗用問題が新しい知見として相談があれば、それを

取り入れる時間的余裕はあったはずだ。

魏紹昌論文は、この盗用事件を指摘して有名である。ただし、解決できない次の3点があるといって放りだした。

1. 李伯元は『繡像小説』の主編であったが、みずからが没書にした劉鉄雲の原稿をなぜ自分でもういちど使用したのか。
2. 劉鉄雲は、盗用についてなぜ抗議をしなかったのか。
3. 「文明小史」と「老残遊記」は、当時すでに流行していたが、読者はこの盗用になぜ気がつかなかったのか。

この疑問3点ともに60年代の研究水準、あるいは魏紹昌の個人的な認識を前提にしている。のちに積み重ねられた研究を考慮に入れると、上の疑問は3点ともに成立しない。これについて私はすでに書いた^{*15}。

結論だけを簡単にのべる。

1. 李伯元死去後も『繡像小説』は刊行されていた。盗用した「文明小史」第59回は、李伯元の死後に書かれた。書いたのは欧陽鉅源しかいない。著者の問題が別に発生する。
2. 劉鉄雲は、自分の文章が「文明小史」に盗用された事実を知らなかった。だから、あらためて抗議をすることはない。没書の事情を明らかにした劉大紳も、盗用については説明していない。

3 「老残遊記」は広く読まれていた。だが、一方の「文明小史」はその存在が長く忘れ去られていた。比較対照できなければ、問題があることにも気づかない。

『滄榕書札』には、「老残遊記」についての謎の発生とその生成過程が記録されている。中国では、残念ながらその謎を解明することができなかった。その主な原因は、研究者たちが先行論文の記述に疑問をもたず、その間違っただまを受け入れたからである。

それ以上に興味深いのは、小さな疑問の背後に大きな問題が控えていたことだ。

「老残遊記」の執筆過程にのみ問題は限定される、と最初は思われた。だが、「文明小史」の盗用問題がある。『繡像小説』の主編者は本当に李伯元か、という疑問も提出された。論争がおこり、編者問題を解決する根拠として盗用事件が持ち出されてくる。さらに、それらの作品を掲載した『繡像小説』そのものにも疑いが生じた。その結果、刊行が遅延していた事実が明らかとなる。この刊行遅延問題は、盗用にも密接にかかわっているのだ。

問題は、当初は予想もつかなかったほど複雑なのである。 罍

【注】

9) 劉厚沢は、魏紹昌に頼まれて『文匯報』掲載論文の切り抜きを劉蕙孫に送った。3月20日付だ【043-61-04】106頁。

10) 劉厚沢が『資料』においてほどこした注釈5(93頁)、注釈11(95頁)に阿英「老残遊記版本考」をかかげる。

11) 謎が日本で解明された後、魏紹昌は文章を書いた。「談談《老残遊記》的写作刊印情况」(『光明日報』1983.5.10 / 『牡丹伝奇』福建人民出版社1984.8 / 『晚清四大小説家』台湾・商務印書館1993.7)では、つぎのように説明している。「(劉鉄雲)日記には初編あるいは二編を明記していなかったため、当初劉厚沢は日記にある二巻は当然二編の巻数だと誤った」38頁。当時、劉鉄雲日記の謎を指摘したのは、ほかならぬ魏紹昌だった。誤った人々には当事者であった魏も含まれる。責任を劉厚沢に押しつけて自分は無関係を装うのはいかなものかと思う。本稿注5に書いたように、魏紹昌は『資料』の劉厚沢注は自分が書いたと私に告げた。誤解をしたのは、あきらかに魏自身だった。当事者として何か書きようがあったのではなからうか。魏は、該文で阿英の断定についても説明する。「阿英の文章に甲辰(一九〇四年)に刊行されたとあるが、彼が切り抜き本によって下した大まかな判断にすぎないことを私(魏紹昌)は知っている」。あとからなら、なんとでもいうことができる。

また、魏紹昌「良友版《老残遊記》二集僅刊六回の内幕」(『晚清四大小説家』台湾・商務印書館1993.7)がある。

12) 樽本照雄「天津日日新聞版『老残遊

記二集』について、『野草』第18号
1976.4.30。のち『清末小説閑談』
1983所収。『野草』掲載論文は、草平
「《老残遊記》(《天津日日新聞》
版)初集、二集刊行考」(『文学研究
動態』1982年第10期)として紹介さ
れた。のち劉徳隆・朱禧・劉徳平編
『劉鶚及老残遊記資料』所収。また、
TIMOTHY C.WONG(黄宗泰)“NOTES
ON THE TEXTUAL HISTORY OF
THE LAO TS'AN YU-CHI”(“T'UNG
PAO (通説)” VOL.69 1-3合併号,1983)
がある。さらに、劉徳隆、朱禧、劉
徳平「《老残遊記》写作発表年代管
見」、「《老残遊記》版本簡介」がい
ずれも『劉鶚小伝』(天津人民出版社
1987.8)に収録されている。

- 13) 李伯元が「借りること borrowing」
について何も言っていない、と指摘
する次の論文がある。DOUGLAS
LANCASHIRE “A NOTE ON CHAPTER
59 OF THE WEN-MING HSIAO-SHIH
(A BRIEF HISTORY OF ENLIGHTENMENT)”,
AUSTRINA, ORIENTAL SOCIETY
OF AUSTRALIA, 1982. p.134
- 14) 魏紹昌の指摘した箇所以外に無断借
用があることを明らかにしたのは太
田辰夫だ。「『文明小史』をめぐっ
て」『神戸外大論叢』第12巻第3号
1961.8.30
- 15) 樽本「『李伯元と劉鉄雲の盗用事件』
の謎を解く」『清末小説から』第75
号2004.10.1

本誌次号の公開は10月1日を予定

《蔓陀羅克》の原作

渡辺浩司

1

『小説月報』第八卷第八号(商務印書
館,1917年8月25日*¹)に《蔓陀羅克》なる
短篇小説が掲載された。“叢譯”に入っ
ているので翻訳作品であることはわかる。
しかし作品名の下には単に“陸秋心”と
書かれているだけで、原作については全
く触れていない。この原作が判明したの
で、本稿でそれを報告したい。

原作は、Richard Marsh 『Mandragora』
(初出? 『The Strand Magazine』Vol.44-No.260
掲載,1912年8月未見 短篇集 『Judith Lee:
some pages from her life』(Methuen and
Co.,1912年)所収未見)である*²。

原作者Richard Marshについては、拙
稿「『滑稽小説 紙牌』の原作」(本誌
『清末小説から』第92号,2009年1月1日)を
参照。

記者の陸秋心は、本名・陸曾沂、原籍
は江蘇海門、生年不詳、1927年上海にて
没、晩清から、翻訳を含め数作の小説を
発表している。復旦大学中文系ホームペ
ージの“中文系簡史”で、1917年当時の

国文教師として挙がっている“陸曾沂”は同一人物か不明。

2

まず、主人公Judith Leeについて紹介しておく。彼女は聾学校の教師で、すぐれた読唇術を持ち、それを武器に旺盛な行動力で警察に協力しながら事件を解決していく。

Leeの一人称で語られる『Mandragora』のあらすじを紹介する。

週末の休暇から戻った私(Judith Lee)が駅の食堂で食事している時、二人の男が入ってきた。斜め向かいに座った二人の外見と会話から次のことがわかった - 一人はTom Walkerという三十歳くらいの男、もう一人はHuttonという六十近い男で体調を崩しているようだった；HuttonはGeorge Youngを陥れDartmoor刑務所に送ったことにずっと苦しみ、誰かの手にかけて死ぬことまで望んでいる；HuttonはWalkerが関わっていなければすべて白状したいと思っている等々。このように、二人が食事をした数分間、私は熱心に二人の表情を見つつ、会話を読み取っていた。

その年の夏の終わり、私は休息のために、海辺の町 - Easthamptonに行った。町中の宿は満員で、御者がためらいがちに紹介してくれた、少し離れた海辺のLaurel Cottageに行った。そこには、Mrs.Vintonという主人と六歳の娘がいるだけで、彼女は三年前に夫と死別したということだった。ある晩、私は、彼女が涙を流して娘と共に、夫の誕生日という

ことで特に深くお祈りしているのを見、その翌日には、彼女が写真を手に持ち涙を流して夫が無事で過ごし、そして家へ帰ってくることを神に祈るのを見てしまった。不審に思った私は、次の晩、彼女に自らの読唇術のことを打ち明け、更に私が見たこと - 彼女の夫が活着ているのを知ってしまったことを話す。すると、彼女は涙ながらに、夫は確かに活着いて、重労働付きの懲役十四年の刑で刑務所に入り、三年たったこと、周りの人々は彼女を避けて、泊まりに来る人もいないため、それを隠そうと夫は死んだと言っていたこと、しかし夫は無実なのだということ、そして、彼女はVintonではなく、夫の名はGeorge Youngだということ話を話した。私はGeorge Youngの名を聞いた時、驚いたが、その理由は話さず、助けになれるかも知れないと言って、更に詳しいことを聞き出した - Youngは弁護士事務所の事務責任者で、そこに保管を任されていた多額の保証金が紛失するという事件があり、上役らは隠そうとしたが、管財人に告発され、Youngは有罪で懲役刑を受けた；事務所の名は“Hutton, Hutton, and Walker”で、息子のHuttonは事件が発覚する前に亡くなり、父のHuttonは事件以来、急に老けこんでしまった；WalkerとMrs.Youngはかつて婚約寸前まで進んだことのある仲だった等々。私は話を聞きながら、駅の食堂の二人のことを考えていた。

Mrs.YoungにHuttonの住所を教えてもらい、次の日、私はTorquayへと向かった。ホテルに一泊し、翌朝、公園に行っ

た所、Huttonが座っていた。そこにWalkerが現われたので、私は木々で隔られた道に回り、そちらから二人を見ていた。「George Youngが刑務所に入った日からよく眠れない」と言うHuttonに対し、Walkerはmandragoraの入った小さな薬瓶を渡し、「お望みなら、目覚めることなく眠れるよ」と言い、去って行った。Huttonが車椅子で自宅に戻り、二十分後、私が彼のいる部屋へ入ると、彼がちょうど薬瓶の中身を口に運ぶ所だった。私は薬瓶を奪い取り、悔い改めれば神の許しが得られると説得し、Huttonから事件すべてについての供述書をとった。その後、Huttonは元気を回復し、供述書以上のことをたくさん語った - 彼の一人息子がお金の横領犯で、発覚を恐れて服毒自殺したのだが、犯人はGeorge Youngだということにされた；息子は神経質すぎたので、George Youngの悪事に面と向き合うより、自殺の方を選んだのだとされた等々。

私はHutton宅を辞し、ホテルに戻り、彼を尾行している時に出した電報の返事を受け取ると、伝言を残して、Huttonに教わったThomas Walkerの仮住まいへと向かった。呼び鈴を鳴らすと、ちょうどWalker一人だったので、彼が出て来た。私は自分の名を告げ、重要な用件があると言って、部屋に入った。George YoungとMrs.Youngに対する様々な思いが浮かんだので、私は怒りの調子でいきなりWalkerを責めた。彼が息子のFrank Huttonをけしかけて、お金を盗ませたのだとか、それが発覚しそうになった時、息子のHuttonが自殺するように仕向けた

のだから、彼は殺人犯になるのだとか、父のMichael Huttonを騙して息子は単独犯だったと信じさせ、息子の恥を隠すために、Huttonの方からGeorge Youngを犯人にしたてあげようと提案されたことにしたのだとか、証拠をでっち上げてGeorge Youngを有罪にしたのだ等と叱責した。そして、薬瓶を示して、Huttonに毒薬を渡し自殺させようとした公園での会話の一部始終を告げ、しかしHuttonは悔い改めてすべてを白状したと話した。Walkerが私からその薬瓶を奪い取るうとした時、ロンドンから呼んだ警官が到着し、呼び鈴を鳴らした。Walkerは私の首に手をかけてきたが、私の柔術で逆に床に投げとばされた。警官が部屋に入ってきた時、Walkerはもみ合いの際に落ちた薬瓶を拾い、中身を飲み、すぐに絶命してしまった。

翌朝、私はMrs.Youngの所に戻り、何があったかを説明した。その後、Huttonの供述書とWalkerに関する調査で、George Youngは赦免された。Huttonは逮捕されたが、判決前に亡くなった。彼は遺産をすべてGeorge Youngに遺した。

勸善懲悪の冒険小説である。読唇術という性質上、どうしても当事者が見える場所に居合わせなければならないので、偶然の上に偶然が重なるのである。ともかく、小型盗聴器や隠しカメラも無い時代、ほとんど初対面の人間から、他人に聞かれたとは全く思っていない自分の話したことをそのまま告げられるのは、さぞかし驚くことであつたらう。

ついでに、文中では、冒頭の食堂での二人の会話部分、公園での二人の会話部分、最後にLeeが二人の会話をなぞる部分の三個所にしか出てこないが、作品名にもなっている“mandragora”について触れておく。mandragoraは、mandrakeともいい、ナス科の多年草、有毒であるが同時に薬草として催眠・麻酔に古くから使われていた。また、その効用から様々な迷信と結びついてきた。『英米文学植物民俗誌』(加藤憲市, 富山房, 1976年4月27日)の「Mandrake」項から引用する。

迷信のひとつに、mandrakeは絞首台の下に生えて受刑者の体液で育つといい、ドイツではこの草をGalgenmännleinとも呼んでいる。だから、この草の根には人間の執念が宿っている。霊草として悪魔が常にこれを見張り、土から引き抜くときには恐ろしい悲鳴を上げて、それを聞いた者は即死、または発狂するという。(338頁)

やみではランプのような怪しい光を発するといい、古くは、どろぼうがろうそくにこれをゆわえて魔法の明かりとした。フランスではこの草をmandagoireまたはmandagloireと呼び、これがなまってmain-de-gloire、更にそれが英語に直訳されて‘Hand of Glory’となった。‘Hand of Glory’とはいわゆるどろぼうの魔の手で、もともとは受刑者の遺体から切り取った干からびた手をいい、どろぼうがこれにろうそくを握らせて押

入れば、家人を眠らせたまま、らくに盗みができたという。(339頁)

この物語の展開にふさわしい毒と言えよう。

3

中国語訳について述べる。他にも訳されていた場合の参考にできると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原文	中国語訳
Judith Lee	裘迭絲 李
Michael Hutton	密謙爾 漢敦
Frank Hutton	弗蘭克 漢敦
Thomas Walker (Tom ~)	湯姆司 華克 (湯姆 ~)
George Young	喬治 楊
Easthampton	東漢姆墩
Torquay	託克

内容については、丁寧に訳していると思う。もちろん誤りもあるので、内容理解に関わるものを挙げる。冒頭のLeeが二人の会話を「見る」場面である。

At last his companion commented on it they were sitting sideways to me, so that I could see both their faces. (199頁)

(とうとう彼の連れがそれについて批評した 彼らは私の斜めに腰かけていた、だから二人とも顔が見えたのです。)

余因潛聽之。(1頁上,句点は原文のまま)

(そこで私はこっそりと聞きました。)

"I'm a sick man already sick unto death."

Although they were unaware of the fact, I had become more absorbed in their conversation than in my lunch. I thought, as he said that, how he looked it. There was a quality in the coming shadow which seemed to be upon his face which went to my heart. (200頁)

(「私はすでに病気だ 死に至る病気だ。」)

彼らは気付いていなかったが、私は自分の昼食より彼らの会話に夢中になっていました。彼がそう言った時、どんなにそれらしい表情だったでしょう。彼の顔には迫り来る影の特徴が現われているかのようで、私は胸が痛みました。)

老人曰：“吾病且死。尚復何言。”

余聆至此。知二人之間。必有秘密不可告人之事。因亦無心進食。而凝神以聽其言。(1頁下, コロン、引用符は補った)

(老人は「私は病気でもう死ぬんだ、この上何を言うんだ。」)

私はここまで聞き、二人の間にはきっと人に言えない秘密があるのだとわかりました。だから食事を続ける気もなく、集中して二人の会話を聞いていました。)

原作は読唇術を使ったと直接言っていないが、読んでいけばわかることである。読唇術ならば表情も話も同時にわかるのだが、中国語訳は聞き耳を立てているこ

とにしたので、表情の記述を略してしまうことになった。

もう一つ、単語の誤りを挙げる。Torquayの公園からHuttonが自宅へ帰る時、“bath-chair”(車椅子)が使われる(209頁)。中国語訳はそれを“浴椅”と訳す(7頁上)。風呂場で使う椅子を公園に持って行っても使えないと思う。

改訳も見られる。Mrs.YoungがWalkerと婚約寸前まで進んでいたと語った後のLeeの感想の部分、続いて、LeeがWalkerを叱責する部分である。

A faint flush tinged her white cheeks. I wondered if that had had anything to do with the position Mr. Walker had taken up. (206頁)

(彼女の頬がかすかに赤くなった。このことはWalker氏が占めている地位と何か関係があるのだろうかと思いました。)

言次。紅暈於頬。余聆而志之。自念湯姆華克與喬治楊實為情敵。此亦案中大可研究之點也。(5頁下)

(そう言った時、彼女の頬に赤みが差した。私はこれを聞いてしっかりと心に留めました。湯姆華克と喬治楊は実は恋敵だったのだ、これもこの件では十分に考慮すべき点だと思いました。)

"You made black seem white; you manufactured false evidence; you lied, and lied, and lied and George Young was sentenced to fourteen years' penal servitude. Thief, murderer, liar, you have

succeeded in doing that! I have no doubt you hoped that you were safe at last, you short-sighted fool!”(214頁)

(「あなたは黒を白と思わせたのだ；偽りの証拠をでっち上げたのだ；うそをつき、うそをつき、うそをついた　だからGeorge Youngは重労働を課す十四年の懲役刑を下されたのだ。泥棒、殺人犯、うそつき、あなたはうまくやったよ！きっと自分ではもう大丈夫だと思っていたのだろう、目先のものしか見えない愚か者が！.....」)

余復進曰：“汝顛倒黑白。捏造證據。備極人間之誑。而喬治楊祇以昔曾爲汝情敵。乃無端受十四年之徒刑。竊賊。謀殺犯。誑徒。汝繼續而爲之。一身而兼之。吾信汝方自幸到底安樂矣。汝目光短淺之愚夫。.....”(10頁上)

(私はまた更に：「あなたは黒と白をひっくり返したのだ；証拠をでっち上げたのだ；この世の嘘をすべてつき尽くした

だから喬治楊は昔あなたの恋敵だったというだけで、理由もなく十四年の懲役刑を下されたのだ。泥棒、殺人犯、うそつき、と続けてなっていき、あなたはそのすべてだ。ちょうど自分はもう大丈夫だと思っていたのだろう、目先のものしか見えない愚か者が！.....」)

原作は、Mrs.YoungとWalkerとの過去のことを重視していないようである。一方、中国語訳は、それを関連づけて、George Youngを陥れた理由にしている。これは、中国語訳の方が筋が通っている

ように思う。或いは、原作の雑誌掲載または短篇集1912年版では中国語訳のようになっているのかも知れない。

最後に、Leeが自身の読唇術をMrs.Youngに話す場面を掲げる。

“The secret I have kept from you is that I have the gift of seeing what people say by merely watching their lips, even if they are speaking to themselves.”(203頁)

(「私があなたに隠していた秘密は、私には唇の動きを見るだけでその人が言っていることを理解するという天賦の才能があるということです、たとえその人が独り言を言っているだけでもです。」)

余曰：“吾之秘未相告者。吾蓋有一特長。能觀人唇動而知其口所欲言。”(3頁下)

(私は「私のまだ言っていない秘密は、私には特別な長所が一つあるようで、唇の動きを見るとその口が言おうとしていることが理解できるということです。」)

4

主人公が人の依頼を受けて事件を解決するわけでもなく、犯人や関係者が勝手に自白・証言するのを見ているだけで推理も何もないので、「冒険小説」と書いた。しかし、偶然ではあっても、表に出していない事件を発見し、解決しているので、一応「探偵小説」でもある。ということで、現在では顧みられなくなっている女探偵Judith Leeものが、五年遅れというほぼ同時代に中国語に翻訳されていたことを明らかにした。

なお、Judith Leeものの最初の日本語訳は、管見の及ぶ限りでは、乾信一郎訳『ただの偶然?』(押川曠編, 乾信一郎訳『シャーロック・ホームズのライヴァルたち』(早川書房, 1983年10月15日/2000年9月15日二刷)所収『Was It by Chance Only?』*3の訳)である。この日本語訳には、何の断りもないが、Judith Leeものの第一作『The Man Who Cut off My Hair』冒頭にある彼女の自己紹介が付けられている(311-312頁)。これはもちろん読者にとってJudith Leeものを鑑賞するのに欠かせない前提であるからであろう。

翻訳の登場は、言うまでもなく中国の方がかなり早い。ただ、その中身について、中国語訳からは、読唇術の神がかり的な効果がそれほど伝わらないので、日本語訳のような説明があった方がよかったと考える。そうすれば、冒頭部分を誤解することもなかったであろう。 罍

【注】

- 1) 《小説月報》は東豊書店の影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》(1979年10月)を使用した。影印には奥付が無いので、発行年月日については、『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編, 齊魯書社, 2002年4月)を引用した。なお、同目録は作品名を「蔓陸羅克」に誤り、創作と見なしている(455頁, m0192)。
- 2) 本稿では、『Judith Lee』(George Newnes, Ltd., 刊行年不記)所収を使用した。なお、Methuen and Co.版の刊行年(1912年)は、British

Libraryホームページの検索結果による。1913年とするものもある(押川曠「解説」422頁)。

- 3) 同『シャーロック・ホームズのライヴァルたち』の「出典一覧」によれば、日本語訳が基づいたのは短篇集『Judith Lee; Some Pages from Her Life』(Methuen, 1913年)となっている(428頁)。そこには言及されていないが、雑誌には、『The Strand Magazine』Vol.43-No.256(1912年4月)に掲載されているらしい。未見。

【参考文献・ホームページ(HP)】

- 陳玉堂編著《中国近现代人物名号大辞典》浙江古籍出版社, 1993年5月
- 武禧「哀情小説《雙淚碑》(清末小説過眼録(24))」 - 『清末小説から』第36号, 1995年1月1日(劉徳隆『清末小説過眼録(清末小説研究資料叢書5)』(清末小説研究会, 2004年1月1日)所収を使用)
- 押川曠「解説」 - 押川曠編, 乾信一郎訳『シャーロック・ホームズのライヴァルたち』(早川書房, 1983年10月15日/2000年9月15日二刷)所収
- William G.Contento管理HP「The FictionMags Index」
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2009年3月16日確認)
- Dennis Nowicki 管理HP「Studium Magazine」
<http://www.studiummag.com/> (2009年3月16日確認)

从 MS.FOUND IN A BOTTLE 到《冰洋双鲤》
——论清末民初意译风尚背后的策略选择

吴 燕

[摘 要] 本文试图通过对1912年《小说月报》上刊登的短篇小说《冰洋双鲤》的翻译策略的解读,分析当时社会文化语境中流通的对“他者”的想象与理解,是如何以潜在的方式规约着译者的翻译策略的选择。

[关键词] 翻译策略; 他者想象

《小说月报》三卷(1912年)十期刊载了根据美国小说家埃德加·爱伦·坡的《瓶子中的手稿》(MS. Found in a Bottle)翻译而成的《冰洋双鲤》一文。译者为时任杂志编辑恽铁樵(直接署名焦木,未注明“译”)。在杂志卷首的目录上,此文被安排在短篇小说栏中,标题下加注“冒险小说”字样,及原作的英文题名(Found in Bottle)。原作者名没有提及,大约是因为译者想当然地把小说的叙述者与作者当成同一个人。译文开篇第一句话“余德人亚兰坡也”即可为证。

小说以第一人称的口吻叙述了一段惊险的海上历程:“我”孑然一身登上一艘从爪哇岛驶往巽他群岛的航船,途中遭遇了前所未有的风暴。“我”鬼使神差地被

浪涛卷上了一条“鬼船”:船上的一切都陈设都很古老;船员们白发苍苍,但精神矍铄,且对“我”的存在视若无睹。于是“我”在船上自由来去,并在船长室里找到了纸笔记下了自己的奇遇(就是小说的正文)。最后,这艘诡异的巨轮在风暴的吹送下向北而行,并最终被吸进地球北极的无底深渊。

《冰洋双鲤》以半文言的形式译就,仅4100多字。而小说的现代汉语译本^[1]则有近6800字,即便去除文言文比白话文精炼的因素,这2000字左右的差异仍然显得突兀惊人。考虑到译者恽铁樵身兼《月报》主编之职,且其曾明言“翻译”与“创作”之不同^[2],应当不至于像其它译者一般轻率对待原著。但是,对这样一个清醒而审慎的翻译者,究竟为什么会为一篇作品作出如此巨大的改动呢?

《冰洋双鲤》对原作的增删改动

《冰》对原作进行的改动,有一些是相当明显的。例如,他将小说开篇处关键性的法语引文及文末的作者注删去,从而完全消除了小说精巧的叙述结构对全文主旨的影响。因为正是它们的存在帮助小说完成虚构空间向现实世界的僭越,从而使原作跳脱出“冒险小说”的通俗框架,拥有更深邃的意蕴。显然,恽铁樵受限于语言及时空格局,无法全面把握作品的审美维度,而只能对奇崛曲折的情节有所感受。因此,恽氏便据此,将作品归类为“冒险小说”。我们也可以说,恽氏对此作品的翻译策略的设定,完全是以此认识为基础的。

另外,原作故事的叙述重点被完全置

放在“我”阴差阳错地被抛上鬼船后的所见所闻，而在译作中，译者却自行填补了大量“我”在第一条船上的旅途见闻，而鬼船上的遭遇却被大大压缩。从文本表层来看，“我”在两条船上的遭遇占用的文字分量是相当的。这或许也是恽氏为译作拟题“冰洋双鲤”（而非“孤鲤”）的原因。除了大段的删节与填补，有一些细部的调整也不容忽视，因为它们除了使小说整体的叙述机制产生根本改变之外，也间接折射出译者对文本所传达的文化形象的体认与解读。例如，在对小说叙述者“我”的角色定位上，恽氏笔下的“余”就呈现出别样的特色。

文章开头写到“我”登上了驶往未知旅程的船只：

“After many years spent in foreign travel, I sailed in the year 18-, from the port of Batavia, in the rich and populous island of Java, on a voyage to the Archipelago of the Sunda islands. I went as passenger – having no other inducement than a kind of nervous restlessness which haunted me as a fiend.”

恽氏译文为：“千八百六十二年，余自挪巴岛之巴达皮亚港，附海舶赴桑塔。首途状况，无可记述者。余老于行旅，船客作种种怪剧，他人讶为创见，自余视之，皆辽东豕也。倦则蜷伏舱中，饱则凝眺甲板。然使余能安抵桑塔，则所可记述者，如此而已”（下划线为译者自行添加的信息）。

两文对比可发现叙述关注点的明显不同，原文以回顾式的晦暗语调开始叙述，关注焦点是“我”自身焦虑无着的心理状态；但这种心理状态在译文中却全无踪影，

从补充的语句看，“余”更关注的是“船客种种怪剧”。换言之，原作的叙述是“内视”的，而译作则是“外视”的。

这种叙述关注点的不同在文中很多其它细节都有体现。例如对所乘船只外观的一段描写。原文为：Our vessel was a beautiful ship of about four hundred tons, copper fastened, and built at Bombay of Malabar teak. She was freighted with cotton-wool and oil, from the Lachadive islands. We had also on board coir, jaggeree, ghee, cocoa-nuts, and a few cases of opium. The stowage was clumsily done, and the vessel consequently crank.

译文：“所乘船，载重可四百吨，张帆之桅凡三，为新制于孟买之船厂者。船身为梯克木构成，稳健可恃，漆蔚蓝色。阑干窗槛，皆以铜为之。金碧交辉，美丽悦目。船中旅客之外，货物绝多，有油，有木棉，有砂糖椰子。若罐头食物，若鸡卵，若鸦片，重量略如船所能胜，故各物之位置从其类，不能匀配。船体因微侧。船主老斲轮首，渠谓旅客，是航海常事，不足虑也”（下划线为译者自行添加的信息）。

如果说原作中的船上世界是暗黑沉郁，回旋着未知命运恐怖跫音的末世空间，那么在经过译者“合理”补充的译作里，这世界则是色彩分明、人声鼎沸，显得富有生机的俗世人寰。原作的“我”是内省的，孤绝的，而译作的“余”则处处显露出对外部世界的强烈兴趣与认同感。翻译过程中，这样的主体迁移究竟何以发生？

“游记”的传统观察方式对翻译策略的影响

我以为，造成恽氏在翻译过程中的偏

差的原因，除了语言水平，及顺应读者需求的考量，更根本的是由于文化差异造成的误读。其中最根本的误读就在于，译者把这部反诘科学、驳斥理性的现代主义作品，读成了一篇对奇特经历的记述（“冒险小说”）。而译者通过先增后减的方式，把一艘鬼船上的历险故事，扩展而为“乘船旅行-突遇风暴-卷上鬼船-随船沉没”四部分内容均等的线性结构，实际上体现了一种企图依时间顺序忠实记录“可能”发生的事件的努力，而此举背后的文化依据，则是传统“游记”文体的表述与观看方式根深蒂固的影响。

陈平原在《中国小说叙事模式的转变》一书中曾辟专章谈及“游记”对小说家的启示，认为首先在于游记对山水自然的精细刻画，其次在于游记作者叙事的视点。他认为，游记最主要的作用是“录见闻”^[3]。中国游记往往以时间的顺序来串联各个场景，也即文本的顺序流模仿记录者游历景点的时间流，因此场景与场景之间是按照被造访的顺序更迭的。这样的安排看起来是观察主体优先，其实恰恰相反，因为观察主体只是在做一件记录的工作，他并没有刻意地去调整事物展现的顺序，一切都是“行到水穷处，坐看云起时”的悠然随心，不露人工斧凿之痕。中国游记中的旅游者秉持道家无心优游的原则，更掺杂了史家直笔录史的传统，晚清小说家们在此基础上，更认可作一记录者的角色。

然而，随着西方游记的译介传入，传统的“游记”文体在清末民初的特殊文化语境中开始发生变化，其内涵也更形复杂。因为西方游记文体遵循的是一种截然不同

的观看与记叙的逻辑。如果说，中国游记的主体与被观察的对象之间是平等的关系，观察者的“看”是纯粹而随兴的，并未刻意将观看对象进行割裂与重组；而西方游记中，主体与被观察的对象之间则是不平等的。主体（旅行者）根据自身的意识标准，把异域文化景观区分成地理环境、人口状况、经济、政治、交通、风俗等等几大类别。在根据这几大类别进行记录的同时，进行关于文化及种族之优劣高低评判。

特别需要指出的是，印刷技术的成熟与期刊杂志等新型大众传播市场的完善，使后一种观察他者的方式，假借摄影作品的“拟像”作为支持，以其“客观、科学”成为更受民众信赖的新的观看方式，渐次取代中国传统认知主体的物我无间的观看方式。西方严谨的学科分类与知识体系，于是伴随着这种观看方式的转变，在帝国主义殖民势力的扩展下，成为清末民初进步势力所崇奉的强势话语范式，并理所当然地占据支配性的位置。

简言之，“游记”在当时的文化语境中，带有混杂的意味：它一方面与知识的获得以及“科学”、“理性”等进步观念相联系，另一方面其中仍残存着传统游记的物我无间，随行随录的风格。受到这样的“游记”观念的影响，恽氏对 MS. Found in a Bottle 的翻译，也就体现出混杂的特色。他一方面将“冒险小说”与西方的“游记”文体相混同，另一方面又受到传统“游记”文体的影响，因此他才下意识地把材料根据时间顺序重新排列，并补充他认为必须的生活细节。也就是说，恽氏所为，不过是依据他心中理想的“游记”模式，对眼前的“冒险小说”进行重构而

已。

叙述主体的“混血”特质

前文提及，原作的“我”与译作中的“余”呈现出了两种不同的主体形象。“我”是一个阴郁的自省者，而“余”则更像一个传统游记文体中的主人公，随时准备记录下周遭发生的一切事物。

恽氏在翻译时，其本意应是要尽可能地捕捉并还原一个“西方人”的形象。无奈他心目中的“西方人”形象，是受其主观意识的过滤的“应然”的形象，而非爱伦坡原作中“本然”的形象。这与他对待“冒险小说”文体的理解，受到了传统“游记”文体的牵制，如出一辙。下面的分析将向我们展示，如果说原作的“我”是一个怀疑一切的虚无主义者，西方科学理性主义的反叛者，那么译作中的“余”就是一个混杂了西方科学理性与中国传统特质的“混血儿”。

原作结尾部分的“and thundering of ocean and of tempest, the ship is quivering, oh God! and – going down”，在译作里被简短地译成“吾不能复书矣”。这一改译颇耐人寻味。原作以going down鲜活地重现死亡来临的瞬间体验，而译作用“不能复书”暗示死亡，或许可以理解为是对叙述主体作为“记录者”这一身份之本质的暗示。

译作中有这样一段“余”的自述：“余固崇实，有所非，亦有所是，胸中泾渭判然。非若世之私淑黑智儿诸君，举一切事物，咸以怀疑了事者，一言蔽之。凡溢真理范围者，皆余所不乐听，尤余所不肯言也。”这段话在原作中并不存在，我

们或可将其视为译者对作品主人公形象整体定位：他“应”是一个崇奉理性与科学的人。很显然，这一理解与原作的设定有相当大的偏差，因为爱伦坡正是在质疑理性反思科学（其实这在原作第一段中已经充分表明）的合法性与权威性的前提框架下创作此小说的。身处追寻科学的狂潮之中的恽铁樵对西方世界的理解，比原作者整整迟了一个世纪。

受到此“应然”形象的影响下，译者便开始对原作中的“我”进行量体裁衣式的再创作，因此他必须一再强调主人公“记录者”的身份及“记录”这一行为的重要性。在小说结尾，译者自行补充道：“余不欲此事之湮没无闻，爰为此记。至其理安在，余疲弊之脑力，不堪思索矣。”把人们对“记录”之事的关注，转移到“记录”这一行为上来，这等于是巧妙地为叙述主体开脱。既然“纪录”的意义在于让后人有机会完成“余疲弊之脑力”无法完成的理性探索，那么记述这个“溢出真理范围”的事件的行为就得到了合理的解释。叙述主体的理性形象也就得到了维系。

简言之，在译者眼中，一个西方人“应该”是相信真理及追求理性的。他们追求奇遇与冒险，深入异域，目的是为了观察、记录，分析并评判，最后得出科学的认识。即便生命被不可思议之事所吞噬，他们作为西方人的理性本质也“理应”不变。于是，结合前述“吾不能复书矣”的结尾，译者为我们的展现的是一个生命不息书写不止的“记录者”叙述主体。这一翻译策略的选择，应该说是很恰切的。因为“记录”既标示了西方科学观与知识体系

所提倡的精细观察与记述的科学主义的风范，同时也与传统游记文体中的主体形象并不冲突。

精通西文的钱基博曾赞赏《冰洋双鲤》“绮丽清新，诚佳构也”。这其中固然有当时翻译行为还不够规范的原因，但更重要的是，译文所呈现出来的人物、风格与价值理念，与其说是迎合了时人的阅读口味，不如说是吻合了时人心目中对西方人及其行为模式的想象。为此，恽铁樵在翻译时，从结构上和叙述主体的形象上都作了调整。而他选择“游记”及“记录”这两个着力点，也是因为其与传统的文化因素有一脉相承的暧昧之处。制约清末民初翻译策略的因素之繁复驳杂，由此可见一斑。

罍

【注释】

- 1) 爱伦·坡. 《瓶子中的手稿》[A]. 王美凝译. 《经典爱伦坡悬疑集》[M]. 辽宁教育出版社. 2005.
- 2) 《小说月报》六卷三期铁樵在译作《情量》的跋语中，谦虚地提及读者对其译文的夸赞：“冯君玉森读拙译情魔小影出山泉水诸篇，善之。远道自香港邮赠莫派桑所著短篇，曰：‘吾每以海滨杂志与足下所译者对照观之，辄觉译文为优。盖译名家小说当更有可观’”。但是，在这样的褒奖面前，恽氏却意识到其中暗示的翻译的陷阱：“夫文之佳者，必处处有我。今处处为原本束缚，不佳可知。冯君将何以教之耶”。可见，恽氏对翻译行为及其规范的认识是较为成熟周全

的。

- 3) 陈平原. 《中国小说叙事模式的转变》[C]. 北京：北京大学出版社, 2003. 185-186

(作者系廣州暨南大學中文系講師，現于日本東京大學訪問研究中。)

中国近代文学研究『留得』第27期(2009.1)は、停刊前1号と称する(つまり28期で停刊という意味)。2010年に『南社大辞典』が刊行される予定。また、王学鈞『李伯元伝』も近刊だとか。

樽本照雄著『林紘研究論集』

清末小説研究会 2009.5.1

阿英による林紘冤罪事件

林訳「ハムレット」

ラム版『シェイクスピア物語』最初の漢訳と林訳

林訳シェイクスピア

林訳チャーサー

林訳ユゴー

中国現代文学史における林紘の位置

林紘落魄伝説

陳独秀の北京大学罷免

周作人が魯迅を回想して林紘に言及する

『林紘冤罪事件簿』ができるまで

『清末小説から』第93号 2009.4.1

「老残遊記」執筆過程の謎1...樽本照雄

《還珠》の原作 渡辺浩司

林訳小説《巴黎茶花女遺事》の訛伝

..... 蘇建新

晚清小説作者掃描(18) 武禧

晚清小説作者扫描 (拾玖)

武 禧

(零八九)

东亚病夫

小説创作:《孽海花》《鲁男子》

曾朴(1872-1935):江苏常熟人。谱名朴华,初字太朴,改字孟朴。又字小木、籀斋,号铭珊,笔名东亚病夫、孟孙、执丹、鲁男子等。父亲曾之撰,字君表,光绪乙亥举人,曾任刑部郎中,早岁与张骞、文廷式、王朝荣称“四大公车”。曾朴16岁与其丁氏二表姐热恋。19岁,迫于父母之命与汪圆珊成婚。是日,竟狂饮佯醉不入洞房。是年中秀才。光绪1995年进入京师同文馆学习外文,结识深谙法国文学的陈季同。1904与徐念慈、丁初我在上海创设小说林社和《小说林》杂志社。以创作小说《孽海花》为时人所知。1907年秋瑾被害,《小说林》杂志连续发表《秋瑾遗稿》、《轩亭秋杂剧》、《秋女士历史》、《秋瑾轶事》、《碧血碑杂剧》、《轩亭血传奇》。1911年后当选为江苏省临时会议员,1925年12月就任江苏政务厅长。1927年,与长子虚白开设了真美善书店,并自称为“父子书店”。到1927年止,他

整整花了三十二年时间,翻译了雨果、莫里哀、福楼拜、左拉、大仲马、法朗士的作品,凡戏剧、小说、诗歌、散文和文艺批评三十种,又撰写了关于法国文学评论、作家传记凡十七种。曾朴晚年居沪期间,与新文学家郁达夫、胡适、赵景深、李青崖、顾仲彝、邵洵美等颇多交往,常常就新文学的发展问题交流探讨。60岁时与中华书局洽谈,拟翻译雨果《悲惨世界》的全译本,未成。1931年夏,真美善书店闭歇,刊物停办,返回故乡常熟种花养病。1935年6月23日因病不治,故于虚廓园红楼。

(零九零)

依更有情

小説创作:《爱之花》

依更有情:真实姓名不详。在《浙江潮》发表小説《爱之花》《恋爱奇谈》。在《杭州白话报》发表小説《儿女英雄》。

(零九一)

如如女史

小説创作:《女举人》

如如女史:真实姓名不详。

探讨:

1、如如女史撰《女举人》由同人社出版,全书16回。根据《清末民初小説目录》知,又有署名“如如生”者,出版有《女举人传》,亦由同人社出版。如如女史、如如生是否一人?待考。

2、近代作家徐彬曾用名“如如”。此“如如”与“如如女史”“如如生”有无关联待考。

(零九二)

小笨伯

小说创作：《中国女儿英雄史》

小笨伯：不知真实姓名。

(零九三)

藤谷古香

小说创作：《轰天雷》

孙景贤(1880-1919)：江苏常熟人。字希孟，号龙尾，笔名藤谷古香，阿员。父孙国楨。曾至日本明治大学学习法律，1907年后供职于日本长崎领事馆。民国后在湖北、江苏等地任检察官、法官，国务院参事。南社社员。小说著作有《轰天雷》，诗集《龙吟草》。

(零九四)

大桥式羽

小说创作：《胡雪岩外传》《泪珠缘》《玉田恨史》等

陈栩(1879-1940)浙江钱塘人。原名寿嵩，字昆叔；后改名栩，字栩园。别号天虚我生。笔名：后荷花十日生、国货之隐者、太常仙蝶、超然、惜红生、大桥式羽。清末贡生。1895年主编《大厦报》。1900年出版《泪珠缘》。1901年开设萃利公司，经营书籍、纸张。1907年创办文艺杂志《著作林》。1909年起在绍兴、靖江、淮安等县任幕客。1913年编辑《游戏杂志》、1914年主编《女子世界》。1916年任《申报》副刊《自由谈》主编。1917年加入南社。1918年成立家庭工业社股份公司，生产“无敌牙粉”，后又附设印刷、玻璃、制盒等辅助厂及蛤油、蚊香、薄荷油等日用化学品制造厂。1930年创办并主

编《上海机制国货联合会会刊》，提倡国货。抗日战争爆发后，将部分企业迁设于湖北宜昌和四川重庆，并在云南昆明筹建牙粉厂。1939年在成都因病返沪，1940年病逝于上海。以创作长篇小说《胡雪岩外传》《泪珠缘》《玉田恨史》等而著名。其创作和翻译小说甚多，创作如《井底鸳鸯》《白龙鱼服》《薄命女》《蝶归楼传奇》《断爪感情记》《一行书》《天网》《分牛案》《粉垣埋痕记》《芙蓉影》《嫣红劫》《弃儿》《不了缘》等。翻译和参加翻译《福尔摩斯探案全集》《杜宝侦探案》等。诗词曲汇集《栩园丛稿》。在中国近现代文学流派中，陈栩是鸳鸯蝴蝶派的主要代表作家之一。

(零九五)

梦游上海人

小说创作：《优孟衣冠传》

梦游上海人：不知真实姓名。

(零九六)

古沪警梦痴仙

小说创作：《海上繁华梦》

孙玉声(1864-1940)：上海人。名家振，号漱石。别署海上漱石生、警梦痴仙、退醒庐主人、玉玲珑馆主人、江南烟雨客等。1889年出任《新闻报》编辑，1891年起担任《新闻报》总编辑九年。1898年与吴趼人合作创办《采风报》。1901年独立创办《笑林报》。1905年起担任《申报》编辑二年余。此后又陆续担任过《时事新报》《舆论时事报》《图画日报》《图画旬报》的总编辑。1909年后，以写小说为职业。1915年后陆续办《新世界报》《大

世界报》《上海报》《民业日报》等。
 《大世界报》停刊后，离开报界但仍在报纸上发表文章。曾开设上海书局。担任过捷音公所董事长、伶界联合会会长。著有《退醒庐著述谈》《嫩柳庐笔谈》《报海前尘录》等。所著小说很多，其代表作为《海上繁华梦》，另有《如此官场》《一粒珠》《风尘剑侠》等。是中国近现代鸳鸯蝴蝶派代表作家。 ㊦

清末小説から

- 劉 弘達 讀《劉鶚集》 『書品』2009年第1期(總第115期)2009.1.20
 神谷まり子 黒幕小説の女性像について 『中国黒幕大観』 『野草』第83号2009.2.1
 松村茂樹 第3章 吳昌碩と長尾雨山 『吳昌碩研究』研文出版2009.2.27
 李 慶国 梁啓超の屈原与《楚辞》研究 『追手門学院大学 国際教養学部紀要』創刊号2008.1.31
 日野杉匡大 蘇曼殊の翻案小説『惨世界』抄訳(5完)北海道大学文学部中国文化論研究室『火輪』第24号2008.9
 柳和城、劉承 上海通社与《通社叢書》 『出版史料』2009年第1期(新総第29期)2009.3.25
 程 巍 “王敬軒”案始末 『中華讀書報』2009.3.25電字版
 樽本照雄 清末小説目録の最新成果 劉永文編『晚清小説目録』について『東方』2009年5月号2009.5.5
 柳和城、劉承 上海通社与《通社叢書》 『出版史料』2009年第1期(新総第29期)2009.3.25
 陳 大康 打破旧平衡的初始環節 論申報館在近代小説史上的地位 『文学

遺産』2009年第2期2009.3.15

夏 曉虹 晚清報刊廣告の文学史意義 『南京師範大学文学院学報』2008年第4期

夏曉虹 『旧年人物』

上海・文匯出版社2008.8

- 才子、名士与魁儒 說王韜的“豪放”
 心存救濟利名輕 說鄭觀応的“恬淡”
 傲骨原宜老布衣 說林紆的“好名”
 海外偏留文字緣 說黃遵憲的“真率”
 我自橫刀向天笑 說譚嗣同的“任侠”
 “聖人”心迹 時人眼中的康有為
 寂寞身後事 時人眼中的梁啓超
 我欲只手援祖国 說秋瑾的女傑情懷
 閱讀秋瑾 一代英雄的人生意義
 来自巴黎的警報 梁啓超与五四運動
 從留日到抗日 林長民与五四運動
 外交元老の投袂而起 汪大燮与五四運動
 抗辯政府の大律師 劉崇佑与五四運動
 酒不醉人人自醉
 人生得意須尽歡
 人生有情淚沾臆
 古今人物排行種種
 晚清報紙上的秋瑾之死
 改良少年賈宝玉
 今日黔中大腹賈，当年海外小行人 讀陳季同《学賈吟》手稿本
 兩種新刊黃遵憲集版本小議
 作為教科書の文学史 讀林佺甲《中国文学史》
 そのほか

夏曉虹 『晚清上海片影』

上海世紀出版股份有限公司、
 上海古籍出版社2009.1

- 晚清上海報刊中の秋瑾祖父遺聞
 黃遵憲与早期《申報》追跡
 彭寄雲文史小考
 吳趼人与梁啓超關係鉤沈
 そのほか